

SHOW MEY シネマールム

★★★

秘密の森の、その向こう

2021年/フランス映画
配給：ギャガ/73分

2022 (令和4) 年 10 月 8 日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

2022-114

監督・脚本：セリーヌ・シアマ

出演：ジョセフィーヌ・サンス/ガ
ブリエル・サンス/ニナ・ミ
ユリス/マルゴ・アバiscal

👁️👁️ みどころ

この邦題をみれば、本作はホラー？ヨーロッパのおとぎ話にはよく森や怖いおばあちゃんが登場するから、一瞬そう思ったが、主人公は8歳の可愛い2人の少女だ。しかし、その1人は死んだ母親と同じ名前だからアレレ・・・。

“不滅の名作”と絶賛された『燃ゆる女の肖像』（19年）は、ドレス姿の美しい2人の女性が主人公だったから、“肖像画”の意味を確認し、同性愛(?)を堪能したが、本作では、“時空を越えた少女の出会い”が浮き彫りにする、“女の深淵”を覗き見たい。もっとも私には本作の出来はイマイチ。さて、あなたの評価は？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■セリーヌ・シアマ監督の最終作！こりゃ必見！■□■

私は『燃ゆる女の肖像』（19年）（『シネマ48』108頁）を観てはじめて、8世紀のフランスで若い娘が肖像画を描いてもらうのは、より良い結婚相手を選ぶための“お見合い写真”代わりだということを知った。“映画史を塗り替える傑作”と絶賛された同作では、美しいドレス姿にうっとりしながら、美しい同性愛のシーンにもうっとり・・・？その上で、女の自立とは何か？まで考えさせられることになった。

そんな名作を誕生させたフランスの女性監督セリーヌ・シアマ監督の最新作が本作だが、そこでは「娘・母・祖母 三世代をつなぐ〈喪失〉と〈癒し〉の物語に胸が震える」らしい。そう聞くと、こりゃ必見。

■□■主人公は8歳の2人の少女！■□■

『燃ゆる女の肖像』の主人公はドレス姿がよく似合う美しい2人の女性だったが、本作は最愛の母親を失った8歳のネリーと、かつて母親が遊んでいた森の中でネリーが出会ったマリオンという2人の少女だ。出会った少女はネリーと同じ8歳だが、マリオンは死ん

だ母親の名前。さらに、招かれたマリオンの家に入ってみると、そこはおばあちゃんの家だったからアレレ……。そんなストーリーの中、「娘・母・祖母 三世代をつなぐ〈喪失〉と〈癒し〉の物語」が進行していくが……。

ネリーと、マリオンを演じるのは、映画初出演のジョセフィーヌとガブリエルというサンス姉妹。2人とも可愛いから、それはそれでいいのだが、私には主人公はやっぱり、年頃の美しい女性の方が……。それはともかく、8歳の2人の少女を主人公にしても、セリーヌ・シヤマ監督はやっぱり“女の深淵”をテーマとして描いていくの……？

■□■舞台は森。西欧の児童文学では森は恐いが……。■□■

同じ日に観た『渇きと偽り』（22年）は、オーストラリアを舞台にしたサスペンススリラーだった。そのテーマは、原題がシンプルな『The Dry』とされていることからわかるとおり、1年間も雨が降らず、干からびた荒地となっている架空の町キエワラの“渇き”がテーマだった。それに比べれば、一貫して暗い基調のスクリーンながら、本作の舞台は緑豊かな森だから、渇きとは無縁。しかし、『赤ずきんちゃん』をはじめとした、森を舞台にしたヨーロッパの児童文学では、森そのものも怖いし、森に住むおばあちゃんも恐い奴が多い。

本作にそんな怖いおばあちゃんは登場しないが、ネリーが森の中で出会った同い年の少女の名前が母親と同じだということには一体どんな意味が……。？さらに、ネリーが入った家がおばあちゃんの家だったということには一体どんな意味が……？

本作の邦題『秘密の森の、その向こう』はそんな映画にピッタリだ。しかして、私の評価はイマイチだが、本作についてのあなたの評価は？

2022（令和4）年10月10日記